

〈書評〉

久保芳和 『コイン随想』

(創元社刊、2008 年、194p.、8,000 円)

山 崎 怜

1

著者の久保芳和博士（以下では初出を除き、すべての方の敬称を省く）は、関学の学長をはじめ数々教学上の公務を果し、経済諸学会の創始者、役員要職を果し了えると共に、研究者としては欧米の経済学史、社会経済思想史の専門研究をきわめ、とりわけベンジャミン・フランクリンの独自の研究者であることはよく知られている。

学史、思想史の研究者は原典を尊重し、原典資料の博搜と収(蒐)集に精励し、そこにエネルギーを注ぐ必要のあることはいふをまたないが、原典の現物収集に個人としても努めるタイプ A と、図書館からの借覧とか閲覧、あるいはコピーに主に依存するタイプ B に分かれる。A タイプといえども、すべての原典を個人で収集することは不可能であるから、この区分は相対的なことであるが、こう分けてみると、久保の師である堀経夫先生は A タイプであり、堀の見事な蔵書の一部は関学ほかの大学での複数の堀文庫として今もその令名を遺している。

久保は師をのりこえるかのような道筋で原典収集家となった。例えばアダム・スミスの『道徳感情の理論』のすべての原典版、その現物を収集し、版によつては複数を所蔵されるほどであり、世界でも稀な、この原典の収集家である。久保には他にも多くの原典の収集があり、時代が異なり、原典市場や原典価格、原典との接近度のちがいもあるが、久保は堀をのりこえておられると

もいえる。ゲーテは弟子は師をのりこえることによって師に近づくと述べた。ゲーテといえば『巨星たち』（後述）の表紙にも、ゆかりのコインで飾られている。

「のりこえる」とはいえ、専門外のテーマ、ここではコインのことになると、評価の視点は別に求められなくてはならない。

杉原四郎博士（関西大学・甲南大学名誉教授）も経済学史、社会経済思想史の専門研究者であられ、原典収集、資料の博搜の点では余人のかなわぬ方であったが、切手の収集家としても知られ、労作『切手の思想家』（未来社刊、1992 年）の著者でもあった。

その素材とゆかりは、人物名（思想家、哲学者、音楽家や画家、作家、科学者、政治家たち）であり、編別は前篇は時代別、世紀別、後篇はスミス関係やマルクス関係とか「女性」、「日本」、「科学者と芸術家」といったテーマ別になされた。

切手にも人物以外のさまざまテーマがあり、杉原はそれらのいくつかも収集されたはずであるが、専門に近い人物切手以外の切手について本を刊行することはなかった。

しかし、情感のふかい杉原は日常の生活でも切手を愛し、私宛の手紙でもいつも珍しい記念切手（テーマは区々）を貼り、偶々、私が杉原に送った封書に貼りつけた切手にさえ謝辞をかかれるような方でもあった。留学の頃の私は時折、欧米の現地で人物記念切手を入手すると杉原にお送りして過分の感謝のことばをいただいたことがある。

2

久保も当初は「切手」のコレクターであったようだが、1960 年頃に「コイン」に関心が移ったとしている。そして最初の頃は専門領域の人物の記念コインを収め、やがて収集の対象が拡大して古今の傑出した大人物のコイン収集に傾き、その百人を選んで久保は前著『コインになった世界の巨星たち〈100 選〉』（創元社刊、2006 年）を刊行している。この前著は杉原の本と同じく対象とゆかりは人物であり、思想家、芸術家、作家、科学者など、採用基準も同

一であるといえよう。

何が、どちらがうか。第1に杉原の本は切手であり、美術デザインのため、前篇は総カラー、後篇はモノクロであるが久保は全篇モノクロで印刷している。コインもコインによってはカラーのほうが質感もだろうが、コスト対効果の有利性はすくないであろう。

第2に杉原の編別は既述のように前篇が人物の時代別、後篇がテーマ別の人物に分かれ、久保は全篇人物のアルファベット順で通している。これは人物名の人数——杉原の本は百人どころではない多人数——のちがいにによるのであろうが、久保のばあい、アリストテレスのあとにバッハがあるという次第で読者の側で心のつながりが切られてしまう。時代別とか職業別とかに分けて示されたほうがよかったのではないかとおもう。しかし、これは私のような社会経済思想史家の言い草であってコイン収集の立場からいえば国別とかデザイン上の基準、材質のこととか、分類にはいろいろ、ありうるであろうと推察する。

第3は説明の仕方とその内容である。杉原では人数の多さもあって、主として切手そのものの説明であり、思想とか伝記上の解説はすくない。久保の本は人物の業績とか評伝にいくらかくわしく、1ページ毎にページを変えて説明され、コインとその人物の関係を鮮明に理解できる組版となっている。

しかし、切手は最古のものでも1840年5月のヴィクトリア女王を配したブラック・ペニーなのだが、コインははるかに古く、デザインも材質もしろうとには不案内なことが多く、浮彫り模様をはじめ説明すべき事柄が多いとみられる。久保は発行年、記念周年、その国名、貨幣単位、材質を一樣に示しているが、個々のデザインについては言及していない。これは予定される読者層にもよるところでもあろうが、コインについての、私のような門外漢にはいまひとつ食い足りない点である。

とはいえ、これはコイン・コレクターの本について常識を欠く私の発言のゆえかも知れない。

第4は掲載図版のサイズである。杉原は切手はすべて原寸大と明記しているが、久保は言及していない。これまた、この種の本を知らない私の疑問のおそれがある。

第 5 に、これも常識のない私のおねがいであるが、切手は記念切手をふくめて一般に実用として流通するばあいが多いが、コインのばあいはどうなのだろうか。コレクターの収集目的発行がつよいとすれば、一般の流通コインとそうでないコインとの区別をしようとは知りたいのである。貨幣単位、重さ、材質などである程度は推定できるとしても、門外漢には個々のコインの性格や各国の通貨政策のありようを知る手がかりになるとおもわれる。

3

さて『コイン随想』（創元社、2008 年）に移りたい。うつくしい本である。『巨星たち』もうつくしい本であったが、『随想』のほうは表紙も中身もカラーを増やし、カラー・コインが発行されるようになった今日に対応していて、いっそう、うつくしい本になった。

『随想』の特徴はどこにあるか。

まず、第 1 にコインを取り上げるテーマは人物名から歴史的事象や事件、社会事象、文化現象に変わり、視野は壮大なものになった。

第 2 に「随想」とあるように著者による事象や事件の解説が詳細になされている。そのための著者の事前の煩雑な調査が偲ばれる。テーマが千差万別なので一々資料にあたる必要があったであろうし、あまり知られていない特殊な事項や事象は資料そのものの存在をつきとめるにも苦心を要したとおもわれる。

説明の内容もゆかりの事象や事項の「随想」から、コインの製造とかデザイン模様にも触れたものもあり、有益である。しかし、文章内容に精粗があり、もうすこし、説明文に統一性が欲しい。この点はすぐあとでも述べたい。

第 3 は編別構成に工夫がみられる。全体で 4 部にわかれ、第 1 部「金貨とカラー・コイン」、第 2 部「データで見る記念コイン」、第 3 部「世界史的事象の記念コイン」、第 4 部「コインにまつわる思い出」、それぞれの項目数は第 1 部 15 項、第 2 部 12 項、第 3 部と第 4 部は 40 項づつ、合計 107 項、さいごに（特）の 1 項目を加えて全体で 108 項目である。この編別には著者には一定の理由があろうが、私には疑問がのこった。

第 1 部の集約はコインの材質や形状によっているが、第 2 部のデータはゆ

かりと材質、純度、重さなどを記し、「随想」はほとんどない。第 3 部はさまざまな記念コインで各項目に「随想」を配している。本書の表題に対応している部分である。第 4 部もタイトルに照応しているだけでなく、「随想」にふさわしい箇所である。その第 1 項は「コイン集め事はじめ」でいかにも「随想」らしい部分であり、以下、諸国の独立記念、革命記念から、さまざまな記念のコインについての文章がつづられる。著者がコイン収集にかかわって最もかきつけたであろう箇所であり、読みものとしてもおもしろい部分である。

しかし、この編別基準は全体としては、不透明であって、第 1 部から第 3 部にかけてのコインでも「まつわる思い出」をかけるであろうし、第 2 部に集約したコインをデータのみに限った理由も不明である。大学記念のコインは著者の釈明にもかかわらず、大学人の著者なのであるから「随想」を配して欲しいところであった。

個々の点についていえば、例えば第 4 部第 1 項「コイン集め事始め」をここに置いた理由がわからない。「はしがき」とするのには、含羞があるのであれば「あとがき」の 1 部にするか、もっと分かり易く配置したほうがよいとおもう。

それぞれの「随想」の中身については一定の説明基準を設けて、ゆかりとデザインの関係、コインの表裏の関係（切手とちがい、コインはかならず、この両面をもつ）、デザインの抽象と具体、その他のコイン学を一様にそこに示していただきたかった。コインによっては、共通面のものは別であるが、両面を図版として示していないものもあり、気になった。サイズについても、ほとんど明記がない。「随想」からは私は教えられることが多かった。第 4 部第 34 項の修道院記念コインとか同第 16 項の「一国二制度」の記念コインとか、同第 35 項「ヴォーバン没後 300 年記念貨」における学史家らしいこだわりの究明など、いろいろあるが、すべてに言及する余裕がない。また、1 ページ毎、1 項目毎にご教示をえたいと思うことも多い。

ここでは、1、2 のことのみをしるしたい。第 4 部第 21 項の「問うに落ちず、語るに落ちる」は表題にたのしさもあるのだが、やはり不適切であって本文でこれを論じ尽くし、タイトルは他と同じような平明なものとするべきであ

ろう。第 3 部第 16 項「ジョンソン『英語辞典』出版 250 年」では経済思想史家久保であってみれば、この辞典評を執筆したアダム・スミスのことによって触れてもよかったとおもう。

4

経済学史家には研究上の必要からもコレクターであることの多い時代が過ぎてはうまれた。原典の多くは西欧のものであって、日本の教育機関や大学図書館のみに頼れなかったのである。そのさいごの世代が久保の世代ではないかとおもわれる。いくらかの年齢のちがいは別として、水田洋博士（名古屋大学名誉教授）は世界有数の原典収集家であり、小林昇博士（立教大学名誉教授）もジェイムズ・ステュアートの原典や世にも珍しい稀覯な翻訳書の収集家であられ、その個人蔵書をみせていただき、私は驚愕したことがある。小林はつとに「こけし人形」の収集でも一家をなした人であるが、それを一書にしたことはない。しかし、短歌を詠むことでも一家をなし、生涯に 4 篇の歌集を公にされ、人生の初期と晩年に雄勁な歌集を出された。杉原は物ずめ賞を受賞されるほどであり、『切手』をふくめてコレクターの典例の人であられた。内田義彦博士（専修大学名誉教授）のみは対象の学史家でなく、いわば方法的学史家のためか、一点集中の「読み込み」型のゆえもあつてか、原典のコレクターとはいえないが、知見については専門、非専門を問わず、広くふかい雑学「コレクター」であり、他者のコレクションには関心もつよかった。これは資力の向け方ともいうべき生活者としての価値基準にもよるのだが、内田が本来コレクターならぬコレクターであることを音楽愛好家内田のオーディオ機器収集ぶりから述べるといったことは、ここでは控えておきたい。

久保はこうした世代の輝かしいひとりとして、その一翼をになわれたのである。

本書には大事なところで誤植や表現のミスがみられる。ロッローディ（13 ページ）、Innsbrck（26 ページ）など。協力者のいつそうのご助力を請いたい。

なお、著者が学史家であることから、私としてはファジングなどの小銅貨をなぜ、ふくめないかについて、「あとがき」とかで言及して欲しかったと考え

る。『国富論』とアダム・スミス像を刻印したペニー貨（カーコーディ）1797 年やローマスタイルのエアシャーのハーフペニー貨があり、私たちには大いに関心がある。

おわりに、著者から電話により、私にご連絡のあった次の事柄を読者に伝えたい。これは久保からの依頼によるのではない。

第 1 に表紙カバー掲載分には、ほかにもコインが発行されたものがあること、第 2 はブラジル独立記念（第 4 部第 10 項）のコインのひとつに建物がでていたが、クレームがついて作り直すこととなり、本書には現物が間にあわず、ことばのみで、コイン図案は掲載できなかったことである。

また、第 3 に 101 ページのミレニアム記念コンテストは久保自身の命名であり、金（第 1 位）フランス、銀（第 2 位）アンドラ公国としたのは久保個人の全くの主観によること、ある別人は金はアンドラ公国、銀がフランスとしていう。ここでのアンドラ公国の説明も蒙を啓くところがある。

第 4 に 110～111 ページの日仏交流 150 年記念にはこの本の直前に 1 個でたので現在は 4 個あるといわれる。これは本書カバーの上部にある裏面がエッフェル塔と日本城閣とをあしらったものを指すのか、さらに別のものをいわれたのか、定かではない。

久保はその後手紙をかかれ、2002 年にキューバから 1 ペソ白銅貨 4 種、マルクス、エンゲルス、レーニン、毛沢東のコインがセットでつくられたとして、そのコピーを同封された。本書には不掲載。また本書の新著紹介文が『泰星コイン・マンスリー』2009 年 1 月号にあり、当該文章を私は拝読した。「1 枚のコインがあたかも百科事典のひとつまのように何事かを語る」とそこに記されている。

本書は再言するが、小林の歌集『歴世』と同じく経済学史家の全人生をいろいろ、うつくしい本である。奥付にある著者本人のポートレイト・コインは本書がコインを語りながら、じつは自伝であることをみずから告白したものである。元来、コレクションそのものが多量で完全であればあるほど、コレクターの自伝ともいえるべきものであるから、そのコレクションを収載して、みずから解説した書物、つまり前著と本書の二書があわせて自伝でなくて何であろうか。

私はコインについての門外漢であり、以上において不適切な発言や疑問を呈しているおそれがある。その際には、著者ならびに読者に心からお詫び申し上げます。